

語られたこともある。令室が心配されて、先生の他行を控へられるやうに請はれると、「人間は一度は死なねばならない。何處で斃れても同じことだ」と平氣でゐられたと聞く。血脈が高くて不眠が續き、常に耳鳴りがしてならないといはれるあの病體で、よくもあんなに無造作に動いてゐられるものと驚歎させられたことである。思へば先生は全く生死を超脱してゐられたのであつた。

稻葉圓成師の渡支

諏訪義讓

先生の特異な學風や多彩な年譜に關してはそれ／＼執筆される事になつてゐるから自分は多少關係のある渡支の實狀に就いてのみ追憶してみたいと思ふ。

先生が故國を後にして海外に出でられたのは前後四回であつたと考へる。それは三回に及ぶ渡支と昭和十五年の渡米であつた。先生の渡米はアメリカ開教四十週年記念法要のため法主台下の代理として參られたもので先生としてはその使命の光榮に感激して渡航されたものであつた。併し先生自らの内心には開教そのものの記念法要と言ふ處に渡米の衝動を覺へておられた事と推察する。その開教への關心こそ前後三回に亘る渡支の期

間に於て感得されたものであつた。か様に觀察する事は強ち自分の經驗からのみ割り出したものでなく、表面には現はされない多感な先生が心中ふかく蓄へられてゐたものであつたと信じても疑はない。

扱て先生の渡支であるが次の如き三回であつた。

第一回 大正六年七月—九月 視察

第二回 大正十一年十月—十二年八月 研究

第三回 昭和二年八月—九月 指導

この視察—研究—指導の名稱は自分が假りに附したもので、先生の渡支をかく眺むる事が出来ると思ふからである。

第一回の渡支は（七月二十四日神戸出帆）上杉文秀住田智見の兩師を奉じて上海から杭州蘇州寧波台州を訪れて遂に天台山國清寺に參詣し、返へして普陀山天童山を巡拜し、南京九江を経て廬山を極め、武漢三鎮から北上して洛陽の龍門石窟を仰ぎ、開封天津北京と鐵路を辿つて支那北地の文物に接し、九月十三日北京の都を最後として奉天開城京城釜山を訪ひつゝ、關釜連絡を以て（二十日午前）京都に安着されたのであつた。人も知る如くこの三師は師弟信友同郷の三つ巴式の關係があり、恐らく是れ以上密接なる視察の同行者はなからう。而も三師が共に天台山と廬山をこの上もなく憧憬しつゝ、渡海されたのであつた。近年住田師の舊藏から國清寺前の記念寫真が一葉出て來つて洋服ゲートル姿の三師を珍らしく拜見したのであつたが、今また稻葉先生の親しく記載された『支那旅行日誌』一冊の中に『智者塔前に記念撮影を爲す』の一言にふれて、當時三師の覺へられた感激を新しく想像してみることが出來た。稻葉先生の廬

山を離れられる八月二十八日の日記には欄外に特に『住師船中より廬山を戀人に執るゝが如く其影の見えずなるまで双眼鏡を手より離さず』と記されてゐる。あの一見しては支那と何の關係もなさそうに窺へる住田師が、一身を投げ出して支那に押し渡られたのは確かに廬山があつた。自分は稻葉先生のこの描寫により住田師の模様を手取る如く見得るのであるが、それよりも住田師の様子を傍より眺めて師の心境を看取された稻葉先生の敏感と情愛を掬いたい。先生はこの旅行に出でられた時、家庭には中風の病母と急病となられた愛兒とを殘して午前には門徒の宅で三部經を讀破し夜行十一時五十分尾張一宮發の列車で京都にかけつけ、歸國されてはなほ病癒えざる御兩人に加へて令室の臥床を見出されたのであつた。先生が頑健の身を以て寸時も安易を求められざりし前に、何だか何時も多難が横つてゐた様に感ぜられてならないものがあつた。

第二回の渡支は大正十一年であるが大谷大學が勸令による單科大學として昇格し遠大豊富なる大學構想の一環として實現されたものであつた。後年大學の中樞となれる佐々木月樵師が歐米を視察し稻葉先生が中華に留學された事は既に何物かが約束されてゐた準備であつたと見爲してよい。十月十八日京都を出發して翌日の汽船に投じ二十二日上海碼頭に上陸された。是れより武昌路の東本願寺別院を根據として浙江江蘇を中心とする支那佛蹟の研究が始まる。その重なる調査旅行を、西洋紙ノ一ト二冊に綴らるゝ『支那佛蹟巡禮日誌』に依つて列挙すれば左の如きものである。

(一) 十一年十一月 杭州天目山徑山巖州

(二) 十一年十二月 鎮江揚州

(三) 十一年十二月 紹興寧波奉化溫州天童山

(四) 十二年一月 南京鎮江

(五) 十二月一月 嘉興湖州

(六) 十二年四月 南京漢口宜昌沙市荊州長沙衡山瀟山

この中、第一第三第五第六は明かに研究旅行であつて巡禮日誌には實に精しく調査の結果が述べられてゐる。山河の艱難なる旅程をよく克服し苦力支那宿をよく忍受し廢寺古老をよく問ひ責して、見るものをして處々に珠玉を發見せしむる想ひある紀行であつた。殊に第五の『嘉興と湖州』の踏査は先生自らも會心のものか佛敎研究五の一(大正十三年二月號)に掲載された。

是等研究旅行の外に第二は揚州の法淨寺に於ける鑑真和尚記念碑の除幕式に際し常盤博士を協賛する意味で上海東本願寺開教部の一行と共に赴かれたものであつた。自分は東亜の事變中に揚州を訪れこの鑑真碑の完全に殘存してゐるのを見、寫眞に收めて常盤博士に送り御慶ひを得たのであるが、未だその頃先生もこの建碑式に參列された事を知つておらなかつた。第四は調査旅行と稱するには餘りにも平凡すぎるが、想ふに是れは先生が上海在勤の中島北村兩氏を誘らはむとして正月の休暇を利用して南京を東導されたものであらう。先生の爲人を信ずる自分は敢へて推斷を擅まゝにするものである。第六の旅程は先生が支那滞在中最も長期に亘るものである。この時、漢口本願寺で田中哲堂氏の要めにより青年會の爲め五日間連續の佛敎講座を行はれた。本願寺が立派な日本式建築に出來上つた記念の行事

であつた様である。がそれを濟まして長江を廻り宜昌まで至られ轉じて長沙南嶽瀉山を深く尋ね入つて十二年五月三十日長沙より下流に直航された。實は先生の日記は是れを以て打切られ『五月三十一日曇』とだけ記されて後を見るを得ない。従つてその後の動靜を知る由もないが上海東本願寺の記録によれば『長等神立輪番が六月六日逝去し十日に稻葉師その大導師となつて葬儀を舉行、八月十日稻葉教授歸朝す』と出てゐる。

長等師と先生とは大學の同期生であり漢口へ出發せらるゝ以前までに假初めの病ひが充進し回復の見込みなく夫人を内地より呼び寄せておいて旅行に上られ、南嶽行を先きにして危篤の電報を得ておられ瀉山の調査をすまして急遽、上海に下られたものの様である。先生は想ひ設けぬ友人の死を葬ひ其の後輪番なきあと別院を一時維持された。次期の輪番は九月十二日に至つて任命された清水俊榮師であるが、その間に於ける事實上の輪番であつた事を銘記すべきである。

かくして先生は學究上貴重なる時間を割いて上海別院事務に當られたのであるが歸朝せらるゝまで何等調査旅行に出でられなかつたのであらうか。否、尠くとも一度は意義偉大な旅程に登つておらるゝ。是れを自分は

(七) 十二年七月 廬山

として第二回渡支中の旅行に加へたいと思ふ。是れは太虚法師が廬山の大林寺に於て世界佛教聯合會を催し先生を講師として招いたのであつた。太虚法師と先生とは十二年の四月武昌の佛學院訪問以來の親交である。太虚師は當時夏期に入ると廬山に歐米の外交官や支那の大官連が集るのを着目して企劃を進め

たものであつた。師は近代支那佛教界の傑物であるが明かに巨大なる構想を持つてゐた。是れが機會となつて翌十三年には木村佐伯の兩師が渡支さるゝ事となつた。

以上の旅行及び調査を顧みて先生の考察は何と言つても天台中心であつて其の流れに關係あるものを見落すまいとする努力が處々に現れてゐる。先生の學究は天台教學を智者以後も以前も教理史的に如何に展開したかを跡付けられたものでなからうか。

第三回の渡支は大谷大學の東洋史學支那文學の第三回學生を浦川吉野兩教授と共に引率して五台山を究められたものであつた。従ふもの長谷川不可三松岡北島道端の學生諸氏で今やそれ〴〵の地位で健在しておらるゝ。がこの五台山行は實に苦難を嘗めたもので支那大陸の旅行らしい旅行であつた。大同五台山太原玄中寺など北支佛教の遺蹟としては是非見學したいものが計畫されてゐた様であるが闊張對立の爲め正太線が不通となり大同の石佛を調査した後、人力車を以て代州に入りそれより驢馬の背に投じて五台まで達した。折しも八月三日京都を出發して以來、釜山京城大連北京を回遊し、大同より終日車上にあること三日、代州より馬上にあること二日、而も酷暑と戦ひ支那宿に支那食を喫しつゝ登山したのであるから、其の艱難と疲勞は言語に絶するものがあつた。八月三十日五台の龍泉寺に着き翌日より竹林寺大顯通寺を始め華嚴寺眞容院靈境寺などを拜禮し顯通寺の安壯なること靈境寺の日本三藏靈仙の事などを偲び合ふたのであつた。五台が濟めば當然太原に出でたいのであるが戰雲低くたれ込めて自動車も通せず已むなく東方に歸路を求

めて曲陽定州を經、九月七日夕八時北京に迎り着いた。驢馬で定州まで達した時、一行は始めて安堵の想ひを爲し五台下山記念撮影を行ったと言ふ。この間、稻葉先生は落馬の爲めに内臓の故障まで生じ浦川教授また巨軀を運び兼ねて、二頭建ての馬車にて辛ふじて來つたのである。吉野教授は北京から内地に直行し一行七名は北京を自由見物し濟南青島に足を延ばして故國に歸つた。

この渡支を稻葉先生は大谷大學新聞に昭和三年一月一日(第七十九號)より五回ほど掲載された。併し五台に關する部分だけで終つて何時の歸國であるか明瞭でない。現在では先生の遺書の中にも未だその旅行記を發見し得ない。或は學生諸君が従つておらるゝから先生自らは執筆されなかつたかも知れないと思ふ。自分は是れを道端氏のノートに要めたところが是れまた克明に記載されてゐるに關らず『九月十四日午前八時青島着。午後市内見物』と言ふ一條で終つてゐる。今や休暇中自室のみにあつて確める術もないのであるが、道端氏の記述によれば北京での計畫は『十五日青島より春日丸九千五百噸に乗船、十八日午前十時三十五分京都に歸着』の予定であつたらしい。すでに青島乗船に先んじて十四日安着し市内見物を終へてゐる様子であるから十五日の出帆であつたと推察してよからう。

指折り數ふれば此の第三回の渡支は先生が四十七歳の時で、前後二回に及ぶ支那旅行や調査の經驗をそのまゝ用いて學生を指導されたもので、支那内戦の禍ひを受けたためと言ふより稲葉式らしい支那の調査旅行を實地に訓練されたものと解してよい。

自分は先生の前々三回に達する支那踏査の學術的結果を其の殘されたノートの上に發見されむ事を江湖で紹介すると共に寸陰をも切り詰めて學界に教界に肉身を獻げ盡された先生の生涯を是等三回の渡支期間の中にもまぎ／＼と看取せられむ事を希望してやまない。自分は第一回の旅行に於て上杉住田兩師とよく廣汎に立廻れたと感動したのであるが、愈々第二回の渡支時代は單獨自由の身でもあつたが東奔西走まことに席の暖まる事なき研究調査であつた。或ひは四十二三歳の壯年期の全盛を忌憚なく發揮されたものであらうか。大正十一年十一月二十二日早朝七時浙江の桐廬縣を出發し杭州を經て午後一時汽車に投じ七時上海に着せられた。この時の右様を第二回の日記に次の如く記しておらるゝ。

夜七時十五分上海南站に着。馬車を備ひて東本願寺別院に歸着。六日旅次に就いて以來始めて入浴。入浴後報恩講話を爲す。

先生は是れだけ記したのみで、何の苦痛も億劫も洩らされてゐない。驚歎に價する精神力であらう。先生の此の生活態度こそ滞支期間の隨處に現はるゝばかりでなく實に先生の生涯を通じて持して以て一貫されたものであつた。後塵を拜するもの承けて實踐に移さねばならぬものであらう。休暇となつても彼此の事情に打暮れ日限と紙數の迫らるゝまゝに今少し先生の學術上の功績を列叙したのであるが握筆する事とする。